

【2005 年度第 2 回研究会発表要旨】

人類学暴力研究の課題

高 泉 拓

本発表において、人類学における暴力研究を整理、比較検討した上で、暴力が個人や集団に及ぼす積極的な意味ないし意義に注目する必要性を提言した。

暴力研究の根源的な問いは、「なぜ暴力は絶えないのか」、「なぜ人は争いあうのか」である。これに対する最も一般的な説明ないし定義は、第一に、攻撃性の表出としての暴力である。それは、「理性的存在」としての人間の深層に潜む、「自然的」な部分の現れであるといえる。フロイトは、人間の諸現象は生の本能と死の衝動の対立と融合からなっているとし、後者は、一次的には自己破壊へ、二次的には外部へ攻撃性が向かうものであると論じる。また、動物行動学においてはローレンツによる本能説があり、種の保存と動物の進化に役立つものとみている。第二に、資源獲得といった目的を前提とする手段としての暴力、道具としての暴力という見方がある。この立場においては、暴力の「合理的」側面が強調される傾向が強い。「道具的暴力」においては、リッチズの議論が度々援用され、目的を達するために人びとが用いる、実用的で、物理的な、目に見える個人の肉体による力と定義している。また、こうした手段ないし道具としての暴力の見方によって、より個別的な行使、行使する側の視点を明らかにできると論じている。

上記の立場に対し、象徴主義、象徴人類学の流れを汲む見方が第三に挙げられる。これは、しばしば儀礼的暴力に焦点を当てたもので、物理的・実体的であることを決して強調していない。ブロックは『祝福から暴力へ』においてメリナにおける割礼儀礼の分析を通し、自分たちは「共通の祖先から連なる集団である」という共同体を支える観念を再生産していく過程を明らかにしている。共同体にとって本来危険な「暴力的なもの」は、共同体によって正当化された暴力によって「飼い慣らされる」ことで共同体の秩序が再活性化される。ここでは、暴力が、外部の潜在的に「暴力的なもの」と共同体によって正当化された力という二重の意味を持っていることになる。ジラールはこの暴力の二重性を、「供儀」の問題として考察した。彼は「供儀のメカニズム」を共同体の中心的運動と捉え、供儀のような共同体による満場一致の暴力は共同体の成立、その維持のためには不可欠なものであるとする。そして、社会秩序形成の基盤には暴力的相互性が存在し、全員一致で犠牲者を選んで暴力を集中する「穢れなき暴力」によって解決されているとジラールは論ずる。こうした見方は、暴力や争いが人間社会に伴うとした上で、「暴力的なもの」と「正当な力」のある社会独特のカテゴリー化に注目したものである。

このような 3 つの立場を本発表の問題意識に即して比較検討する。本能論、攻撃性の発露とする立場に対し、社会文化人類学は距離をとる傾向があった。しかし、本能論に立った暴力への見方は、動物と「人類」を比較することによって成り立つもので、人類という普遍的なカテゴリーに基づく視点を可能にしている。こうした西欧近代科学に基づく暴力への見方が多くの社会で共有され、あるいは人間的／自然的というカテゴリー分けが広汎に存在するとしたら、個別の暴力現象に際して「攻撃性の発露か／否か」、「人間的か／否か」というカテゴリー化自体は注目されるべきである。次に道具的暴力とみなす立場だが、これが社会的手段としての合理性を強調するだけに、本能論的暴力への見方に対するコインの裏側であるといえる。従って、

これは同様にカテゴリー化に注目することに意義がある。そして、第三の立場は暴力がある共同体にとってどのようなものか、その関係性を考察するのに最も優れている。ある事象ないし行為がいかにか「暴力的なもの」／「正当なもの」とカテゴリー化されるか、いかに共同性が創出されるかに焦点を当てることが可能となる。

これまで述べたように「暴力現象のカテゴリー化、それへの否定や排除を通じ共同性を創出する」側面を探っていくことが、今後の人類学暴力研究の重要な課題であるといえる。

(たかいずみ・たく／北海道大学大学院)

ネパールにおける「ドメスティックバイオレンス」の社会問題化の過程

幅崎麻紀子

「ドメスティックバイオレンス」は、世界に共通の社会問題として、各国のジェンダー政策に取り入れられつつある。ネパールにおいても 1997 年からスタートした第 9 次五カ年計画の中で、人身売買とドメスティックバイオレンスは深刻な社会問題としてとりあげられている。同計画には、リハビリテーションやヘルスプログラム、女性の収入創出対策等の必要性が述べられている。

ネパール、特にパルバテヒンドゥー社会において、ヒンドゥーイデオロギーは、家族関係の形成に大きく影響している。女性は 1 人の夫と添い遂げることが家族や自分の名誉であると教えられてきた。そのため、夫婦が不和になろうとも、離婚せずに、妻が耐え続ける夫婦像が描かれてきた。しかし、シェルターに逃げてきた女性達の語りからは、それとは異なる女性の姿が現れる。

女性達は、両親に強いられて結婚し、婚家では、夫から妻へ、家族成員から嫁への身体的暴力に遭うが、黙って、その暴力に耐え忍ぶ生活を送る。家計は夫とその両親に握られており、婚家では、経済的にも従順な生活を強いられているが、すぐには逃げ出さない。なぜなら、妻にとっては、夫と別離することは、社会的なスティグマを受けることであり、脅威に感じる事柄だからである。夫に別離をほのめかされるだけで、妻は精神的な虐待と感じている。しかし、最終的には、「夫の殴る権利」を受容するのではなく、そこから逃げて、外に助けを求める。助けを求めるのは、自分の境遇を理解してくれる女性の親戚であったり、警察や NGO であった。そして、法律的手段に訴える者、離婚をせずに、別居したまま、仕事をしながら子どもと生きて行こうと決意する者等、家族に従順なヒンドゥー女性像とはかけ離れた女性の姿が現出する。

また、生家は女性にとって、結婚後、容易に訪問することのできる数少ない場所の一つであり、出産後の身体を休めたり、娘として厚遇してくれる唯一の場所である。しかし、女性達の語りからは、結婚を強要する両親の姿、生家の中での暴力の存在、娘の夫婦関係に問題が生じたとしても受け入れてはくれない生家の姿が明らかになる。

このように、シェルターの女性達の語りからは、夫の暴力に耐えられずに逃げてきた例、生家に戻り別居している例等、様々な夫婦関係の諸相が見られ、現実世界で起きている夫婦の葛藤の姿や家族関係の諸相を垣間見ることができる。

ドメスティックバイオレンスという概念が移入されてまもないネパール社会において、女性達は、夫から受けた暴力を「ピトゥネ、クトゥネをされた（叩かれた）」と表現する。多くの男性が妻を殴る権利を有していると考えているように、夫から妻に向けられた暴力は決して珍しいことではない。「ピトゥネ、クトゥネ」という表現の中には、深刻な社会問題としての夫婦間暴力の様相は見られない。なぜなら、当事者である女性達は、夫の暴力を、「夫は良い人よ。本当に怒った時にちょっと叩くだけ」と表現しているからである。

「ドメスティックバイオレンス」は現在のネパール社会では、一般に普及した概念ではない。しかし、女性達は、シェルターに駆け込み、夫による妻への暴力が、社会が取りあげるべき「ドメスティックバイオレンス」問題であることを知ることによって、「ディーブイ(DV)*」の被害者であると主張し始める。それゆえ、彼女達がディーブイとして語る内容は多岐に渡る。夫や家族による身体的暴力のみならず、夫の蒸発、夫が亡くなった際に未亡人として社会から蔑まれることをも「ディーブイ(DV)」として語っている。

彼女達の経験は、シェルターを運営する NGO の活動を通して、「人権」や「開発」のパラダイムの中で、ネパールにおける「ディーブイ(DV)」問題として社会に広められて行くのである。

*シェルターに暮らす女性は、自分達の経験を「ディーブイ(DV)」という英語を使って表現している。

(はばさき・まきこ／北海道大学大学院)

戦争柄着物に見る近代軍艦の発達

乾 淑子

幕末から明治初頭にかけての日本軍艦を考える場合には、まず鎖国期間中の幕府による大船建造禁止令が嘉永6年(1853)に廃止されたことに言及しなければならない。それによって帆船の国産が始まり、君沢型8隻、豊島型4隻、葦山型10隻が建造された。

汽船はまずオランダに外注され、小型軍艦である海臨丸、朝陽丸(幕府)、電流丸(佐賀藩)などが竣工したが、文久元年(1861)には大型軍艦をアメリカとオランダに外注した。

維新の混乱期がほぼ収束した、明治4年に兵部省海軍部が設置され、5年には帝国海軍省と改訂された。幕府の開設した横須賀造船廠を引き継ぎ、毎年1隻ずつの千t級の木造巡洋船を建造する。更に木造船の胴部に装甲を施した装甲艦「扶桑」、装甲帯巡洋艦「金剛」「比叡」等13隻を明治7年から11年にかけて購入し、その後も国産船と外注船とを合わせた艦隊を計画し、実現していく。

そのためには莫大な費用を要した。よく言われるのは当時の輸出産業であった蚕糸業の成果である。つまり、絹で船を買って日清日露に勝ったと言うほどに明治時代における日本の蚕糸業の発達は目覚ましかった。明治の初年には中国からかなりの絹を輸入していたのにも関わらず、10年程で輸出に転じ、しかもその量は軍備のかなりの部分を賄うほどのものに成長したのである。

日清戦争の直前には1万t級の戦艦4隻を主力に19隻からなる9万t近い艦隊計画であった。

日清戦争を描いたと思われる図1は袷紗である。この袷紗はいわゆる掛け袷紗で、贈答や祝

いなどの席で、荘厳、招福などの意味で品物に掛けられる。通常は袱紗用に製織された布を用いるのであるが、これはおそらく襦袢として織られた典型的な高級縮緬の転用である。それは日清戦争当時に多い錦絵風の様式で戦争場面を描いていることと縮緬の素材から推測できる。しかもその場面の全体を見ると天地が逆に表現されている部分がある。着物の仕立てにおいては肩で前身頃と後身頃が繋がっているために、前と後とで上下が逆になることを避けるために絵羽柄でない反物は文様の上下を逆転させながら配置していくのが常套だからである。

これは海戦の場面を描いたものであることは間違いなく、その正面図に非常に良く似ているのは日本で最初の装甲巡洋艦「千代田」である。千代田はイギリスで建造されて、明治 25 (1992) 年に日本の常備艦隊に編入された。排水量 2439t、全長 94m、要員 350 名で、3 本の傾斜マストを持つ形が良く知られていた。類似した姿は雑誌挿絵、赤絵印判などにもよく見られる。日清戦争においては明治 27 年の黄海海戦、28 年の威海衛攻略戦に参加しており、おそらくこの図は有名な黄海海戦の想像図であろう。

また、この将兵の軍装は、実際とは異なるものである。なぜならこの図のように白いズボンの脇に赤い線が入っているのは陸軍の軍服であり、海軍のものは紺色の無地の揃いの上下か、白の上下の揃いだからである。この図の将兵が陸軍に近い服装であるのは、たぶん、陸軍の部隊は日本中のかなり多くの地点にあり、普通の日本人が良く見にし易かったのに対して、海軍将兵はごく限られた軍港の地域でしか目撃されることがなく、一般人にはその服装があまり知られていなかったことによるのではないかと思われる。

しかしそれでも、たぶん本来は襦袢であった布が袱紗に転用されたということは軍事的な文様が吉祥の意味を持っていたことを証するものであろう。

また、**図 2** は日露戦争時の旅順港閉塞作戦の図と推測される羽裏である。右上の丘から照らされるサーチライトはロシア側からのものであり、その下に小さく描かれる軍艦には太いマストが並んでいる。この時代のロシア軍艦には太く高いマストが 4 本程のものが多く、明らかにこれはロシア型の軍艦であると考えられる。手前の手漕ぎボート上の将兵は商船を沈めて湾内



図 2 日露戦争旅順港閉塞作戦図羽裏

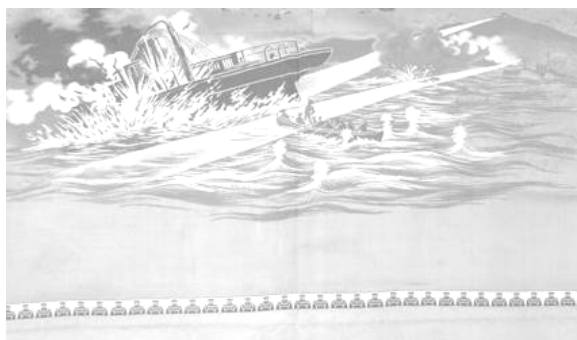


図 1 日清戦争図袱紗 巡洋艦上の将兵

の水深を浅くしてロシア軍艦の動きを封じるという作戦を遂行して救出される場面であろう。左側から中央に向かって大きな船は内火艇である。ただし、明治の内火艇は 17m 内火艇であるのに対して、これは昭和初期の 11m 内火艇や 15m 内火艇の形と混同しているため、明治のエピソードを昭和に作ったものかと思われる。日露戦争柄は昭和になっても繰り返し描かれるものであり、有名なこの場面が昭和に作られることは奇としない。

このように明治時代の軍艦を描いた柄は昭和時代程には正確ではない傾向がある。正確さについては昭和の軍艦柄に関する次稿と比較されたい。しかしそれでも日清戦争時の装甲巡洋艦千代田、旅順港閉塞において使用された内火艇などの大筋においては正確である。当時の錦絵、新聞雑誌報道における挿絵、写真などを参考にして図柄が描かれたであろうと考えられる。

(いぬい・よしこ／北海道東海大学)

言語と伝統文化の保持に向けて：沿海州ウデへの事例

津 曲 敏 郎

今日、少数民族言語は世界各地で危機的状況におかれている。本発表ではその現状と要因を概観し、伝統文化を含めた記録と保持に向けてどのような取り組みがなされているか、発表者のかかわっているロシア沿海州のツングース系民族ウデへの事例をもとに報告する。特に話者自身による記録と、外部との連携による地域の活性化が重要であることを強調する。

今日、世界には 6 千～7 千もの言語があるとされているが、そのうち約半数は話者数が 1 万人以下の小さな言語である。100 万人以上の話者をもつ言語は全体の 4% でしかない。しかもこの 4% の言語のいずれかによって世界人口の 96% が生活している。逆に言うと、96% の言語は、世界のわずか 4% の人によって使われているにすぎない。そのほとんどが消滅の危機に瀕した「危機言語」(endangered languages) である。Krauss (1992) によると、今日 6 千ほどある言語は、100 年後には確実に半減し、最悪の場合、10～5% (600～300 言語) しか残らないだろうと予測されている。

実はこのような深刻な事態が認識されるようになったのは、言語学者のあいだにおいてさえ、ここ 10 数年のことでしかない。まして一般の関心は、自然界の絶滅危惧種などに比べてはるかに低いのが実情である。しかしながら、どんな小さな言語にも民族の長い歴史と知恵が込められており、人類のかけがえのない知的遺産である。人類言語の全体像の解明をめざす言語学にとって、どの言語を失うこともおおきな損失であることは言うまでもない。また話者にとって民族固有の言語は、単なる「伝達の道具」以上の意味をもっている。

言語の危機は、つまるところ「近代化とグローバル化」の結果である。少数民族が国家支配に取り込まれることは、大言語の支配下に入ることを意味する。近代的産業社会の浸透とともに、伝統的生活様式が急速な変化を迫られると、それを支えていた固有言語が存在基盤を失う。そこへテレビをはじめとする大言語メディアの波が押し寄せ、多数派言語による教育(特に寄宿学校制度による言語的統制)が推進されることで、少数民族言語の維持はますます困難な局面に立たされる。また少数者ゆえに、他民族(とりわけ多数派民族)との婚姻によって、家庭内から固有言語の使用機会が失われ、子どもが継承しなくなることで、言わば内部からも大言語による侵食が進むのである。

このような世界的な流れは押しとどめがたいものであり、多くの場合、もはや「復興」を望むことが事実上むずかしいところまで来ている。現実的な方策として、固有言語や伝統文化が、たとえ「実践」は伴わなくても次世代の意識に誇りをもって記憶されること、そのために将来の世代が望めば学べるだけの用意をしておくことが必要ではないかと考える。研究者と少数民族コミュニティ、そして外部の一般市民や支援組織が、三者で連携して、地域の活性化に取り組むことが有効であろう (Tsumagari 2004)。とりわけ、当事者の側から自ら記録するような人材があれば、それを支援しコミュニティ内外で利用できる形にすること、さらにさまざまな機会をとらえて外部からの注目を集めることが当事者の自信と誇りを呼び覚ますことにつながる。

発表ではその一事例として、ウデヘ語で自伝をつづっている話者との出会いや (カンチュガ/津曲訳 2001、津曲 2001 参照)、その村で日本の NGO と連携してエコツアーを誘致していることなどを報告した (津曲 2004)。

参考文献

カンチュガ, A./津曲敏郎 (訳)

2001 『ビキン川のほとりで: 沿海州ウデヘ人の少年時代』. 北海道大学図書刊行会, 札幌.

Krauss, M.

1992 The world's languages in crisis. *Language* 68/1: 4-10.

津曲敏郎

2001 「ウデへの自分史との出会い」『アークティック・サークル: 北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌』 41: 12-14, 北方文化振興協会, 網走.

2004 「ビキンのほとりエコツアー」『北方民族博物館友の会ニュース』 50, 北方文化振興協会, 網走.

Tsumagari, T.

2004 NGO as a Link between Linguist and Community. O. Miyaoka and F. Endo eds. *Languages of the North Pacific Rim* 9: 79-82, 大阪学院大学情報学部, 吹田.

(つまがり・としろう/北海道大学)